

海の妖精と人魚男

贖罪千年のエピソード

松浦暢

(一)

むかし、わたしは、この海原の漁夫うなじゆだった。
どの入江や湾にも、わたしの小舟はおどり、
荒海は、昼夜のへだてなく、わが住処すみかで、
カモメも、わたしほど、ながく住まなかつた、
うつろな洞ほらのほかに、狂乱の嵐をを
ふせぐ家もなかつたし、洞くつこそ
しづかな幸福と安らかな眠りの宮居みやいだつたから。
多年の悲しみから、それは身におぼえたこと。

そう、あれは千年も、むかしのことだつた
千年もむかし！ その長い歳月をとおして
こうも、はつきり、おもいだせるものなのか。
……
はるかな過去を振り返り、千年の
時を、霧散きりさんさせることができんだろうか。
……
この青春の幽囚ゆうしゅと歎きは、ほんの泥土、
うすく膜をはつた、浮きかすにすぎない。
それを吹きはらえれば、青春のよろこびが
まるで昨日のことのよう、浮かんでくる。

キーツ『エンディミオン』第三巻の、海神グローカスのこの告白は、いくつかの意味で重要である。ひとつには、グローカスの、恋人シーラ（海の妖精）探求の苦悩と夢は、そのまま、主人公、エンディミオンの月の女神シンシア、理想美のシンボル探求のそれと符合し、このアーナ的女性像と同一化の前奏曲となつてゐるからである。ふたつには、グローカス＝シーラのエピソードが、グローカス＝サーシーのそれとパラレルになつてゐる。つまり、グローカスをめぐる、対照的な女性像、清純な（精神美）のシンボルのシーラと、自己愛のためには、他人を犠牲にする妖しい（官能美）の魔女サーサーの愛憎の運命劇が、〈青春のよろこび〉という表現に圧縮されているからである。三つ目には、グローカスが、人間の若者から、人魚男か海神に変身するメタモーフォーシス、異界への越境問題をふくんでいるからである。さらに、このほか、キーツの、このギリシア神話の再解釈、人間中心の神話への再創造などが、注目をひくだろう。

はじめの引用にみられるように、グローカスは、千年ま

え、洞くつをわが家とし、カモメを友とする海辺の孤独な若者であつた。しかし、月の女神シンシアを追つて海底にまできたエンディミオンの会つたときは、〈みどりの海底のくぼみ〉に坐り、老骨を経帷子のような青いマントに包み、ひたすら救済者のくるのを待つ身であつた。マントには、海のさまざまのシンボルが、嵐や風、微風と海鳴り、流砂とうず潮など辛苦を語るパターンが、魔法で織りこまれていた。エンディミオンの存在に気づいたとき、老人グローカスは、〈千年の幽因と歎き〉を忘れ、〈あなたのこそ、その人（救済者）だ〉（III・234）といつて狂喜する。〈この苦悩の蛇皮をぬぎさて、どこへ行こう〉（III・240）のことばにも、人魚男から、ふたたび千年むかしの人間の若者に帰れる喜びがあふれている。

〈老人の仮面をつけた若い魂〉のグローカスは、このあと、青春のなつかしい日々を回顧する。かれは、漁夫だったころ、軽舟をあやつり、海の上の朝夕の交替をながめ、夕ぐれには青草に網をひろげて休むという、平凡で単調な生活にあきていた。その結果、陸から海へと関心がうごき、〈海への狂おしい憧れ〉に悩むようになる。

ああ、痴れ者よ！わたしは 狂おしい
憧れを感じはじめた、あの海原の父が
祝福し、あたえる特權のすべてをのぞみ、
海の王国を 自由に遊泳してみたいと。

ながい悲願にやつれはて、そのあげく
極度の発作のあまり、生死を賭けて海に
飛びこんだ。あんなに 濃厚な塩水と
人間の感覚を同化させることは、苦しい
ことのようにおもわれたが、水がまるで
水晶のように滑らかで、手足のまわりで
浮々していたことが、言葉にはいいくせない。
はじめは、じぶんの意志も忘れはて、
くる日もくる日も ただ驚いてばかりいた
おおきな波のうねりに 身をまかせたまま。

おそるおそる 意志の翼を動かしてみた、
思いのままだった！ さっそく 海底の
かぎりない驚異を、つぎつぎ訪ねてみた。

(第三卷、三七四—三九二行)

キーツの「生死を賭けて海に／飛びこんだ」という表現
は、異境への越境、人間から魚男マーマンへの転身のモチーフを、
ふくんでいる。第二巻の『地底篇』の「人間の足にはおぼ
つかない／境界をこえて、はるか異郷へ彷徨う」(II・123—
124) ことの海中篇というわけだろう。未知の水の世界への
跳躍は、死につながりかけないものだが、グローカスにあ
つては、一種の精神的な挑戦であり、成人式的なイニシエ
イションであったのではないか。

〈水のなかへの跳躍の誘惑〉について、ガストン・バシ
ユラールは、スウインバーンの例を引き、水中への飛びこ
みは、天国にいる気分があたえられる点を重視している。
つまり、海水の塩分は、生誕以前から人の血液のなかにあ
つたもので、子供のころ、頭から投げこまれる樂しさは、
ふつうは恐怖だが、スウインバーンにあっては、〈歎喜へ
つながる成人式イニシエイション(1)だつたと分析している。
海へ飛びこむことを、さらに〈二種の洗礼、最高のイニ
シエイション(2)〉とみる学者もいる。それは、異次元の新し
い世界への没入、新しい意識へのめざめと解釈するからで
ある。

この海中への跳躍の誘惑、動機については、キーツは、

グローカスの純粹の意志、海への狂おしい憧れとしている。しかし、かれの参考にしたオウイディウス『^{タモラーネス}転身物語』(卷十三)によると、グローカスの釣りあげた魚が、ある草にふると生き返り、海に戻るのをみて、かれも草を噛んでみると、「土とはちがつたものが恋しくなり」⁽³⁾「海へ入る。」そのあと、オケアヌスとテデュウスによつて海神にされたという風に、偶然の動機が強調されている。このため、グローカスは、緑青色のひげ、頑丈な肩、水いろの腕、鰐の尾（マーマン）、ある魚みたいな尾におわつて太腿をもつ人魚男風の海神に変身する。ランプリエール辞典も、ほぼ似た解釈で、ほんとうもじやもじや髪に魚の尻尾もつ海神グローカスで、予言能力をもつていたとしている。見様によつては、下肢が、グロテスクな魚の形をした、キャリバン的怪物とされていて、このような古典的解釈について、キーツはことさらに、恐ろしい海神のイメージにこだわらず、人魚男的であることは認めながら、それに人間的性格を付与している点は、注目に値する。海中への飛び込みも、グローカスの自発的な自由意志と、異境への憧れによるものだと修正解釈をしている。ここに、新味があるといえよう。

〈異境〉は、この場合、海であるが、歴史的には、

ギリシア時代の「幸運の島」や「祝福されたものの島」のような一種の桃源境である。死者の国とも、永遠の靈の國、不老不死の神々の棲み家とも関係があるかもしれない。あるいはケルト神話の「シーデ」のようなアイルランド先史時代の塚のあるところ、神々や靈魂や妖精の住む神秘的な領域かもしれない。それは、海上の島であつても、地下や、海底、湖底、丘の上であつてもよいわけである。美しく神秘的で、魔法的な魅力がありさえすればよい。ふつうの意識ではとらえられなくとも、死すべき人間の肉眼では見えにくい、ベールに隔てられた異境である。異境は、人間の心の領域にあるため、夢や幻想とつらなる場合がある。グローカスの飛びこむ海をキーツは、現実の海と想像力のえがいた理想の愛の成就する靈的な海に結びつけ、理解しやすくしている。その〈海〉は、未知と危険をはらんだ異郷である。海への跳躍は、空間的・時間的に、異次元世界への脱出となり、生・死を賭けることになる。〈生・死を賭けて飛びこんだ〉結果、はたして、そこには、異界の美しい女性、海の妖精のシーラがいて、グローカスは恋に陥る。助けを借りようとした妖女サーシーに、逆にその魅惑の餌食とされる。新しい海の住人のグローカスにとつて、

海は、このように、善悪、美醜の二面をもつ、危険で魅力的な領域であった。

(二)

人間から人魚男^{マーマン}に変身したグローカスは、海底の驚異に目をみはり、自由に遊泳するが、それもつかのま、異界の生物、水の妖精のシーラの美のとりこになる。オウイディウスによると、シーラは裸身で、やわらかな砂の上を歩きまわり、入江の波で手足を洗う^④という、あでやかな姿で描写されている。しかし、裸身の美しさよりも、むしろ彼女の行動の説明が、主体である。これに反して、キーツの描写は、青い波間に、シーラの美しい肌が、見えかくれする情景のえがき方に、主点が置かれている。いつそう細やかで、詩的な表現方法といつてよい。

ああ悲しいことだ、あの恋が 痞いになろうとは！
美しのシーラよ！ あわれ、なぜ、グローカスは
いつまでも おまえに 求愛をつづけたのか。
心やさしい 若い異邦人よ！ 純白な心で、私は

シーラを愛したが、あの女は受け入れなかつた。

小心な女よ！ 海の飛鳥のように、わたしから
すばやく逃げた、島をめぐり、岬の

鼻をかすめ、偉大なヘラクレスの一生を閉じた
ところから、遠くエジプトのナイルまで。

シーラの美しい肌色^{デイントイヒュ}が 青く澄んだ波の
なかで、ほのかに輝くのを見るにつけ、
情欲は いやまし、たえがたい苦痛となつた。

(第三卷 三九八—四一〇行)

オウイディウスでは、グローカスは、妖精シーラに、メツサナの町の城壁にむかいあつたイタリアの海岸^⑤で初めて会つてゐる。キーツの場合、初邂逅は、どこかはつきりしない。しかし、このタイフォンの娘（一説では、ポルキュー^スの娘）のニンフは、逃げだした場所が、ヘラクレスの死んだ場所、テサリートマケドニアの中間の山とざれてゐる。シーラが逃げだした動機は、オウイディウスは、「怖ろしさ」としていて、キーツも、異形のグローカスを見て、シーラは「臆病・小心」のため、逃げたとみている。ランブリエルは、シーラがグローカスの「求愛を嘲笑^⑦」したためと、

高慢な女性にみたてている。

いずれにしろ、蒼い波間に白く輝くシーラの美しさは、まるでアール・デコのガラス細工にみる水の妖精のように

妖しい姿態である。作品のなかで、キーツはシーラに、ひ

と言もしやべさせていない。しかし、この静画的な幻想的で神秘的な解釈には、キーツ的な特色が活かされているようだ。その寂寥ぶりは、シーラと対照的な魔女サーサーの

多弁さを浮きたせている。追つても逃げられるシーラへのやみがたい恋の苦悶から、グローカスは、ついに魔女サーサー（キルケ）に相談して、援助を受けようとする。

そこは、もとコルキス王の妹だったが、夫を毒殺したほどの性悪女のサーサー。依頼者グローカスの愛情を、じぶんに惹きつける。情ないニンフに、恋の焰を燃やすより、あなたに気があつて、あなたと同じ情熱にとらえられている女の愛情を受けた方がよいと、逆に誘惑するわけである。こうした邪まなサーサーの求愛を、オウイディウスの『転身物語』では、グローカスは、きっぱりと拒否している。シーラ（スキュラ）への変らぬ愛を誓う男に、魔女サーサーは立腹するが、その怒をシーラに向ける。猛毒の汁液をだす葦草を切りきざみ、つぶして、ヘカティの呪文をとな

えて、妖精シーラの水浴する泉に入れる。オウイディウスのこのあたりの条りは、キーツの読んだといわれるサンディ英訳本では、こう書かれている。

シーラは 水浴にきて 腰まで水につかり
臀部のまわりに 犬がいるのをみておどろき

後じさりをする。はじめは わが身の一部とは

思わなかつたが、やがて、そなだとわかり

犬の恐しいあごに脅える。しかし、逃げ

ようすると、じぶんが 犬をひっぱつている。

太腿と両足が変身して、狂氣の呪いのとりついたケルベルス（地獄の番犬）の吠える口となつていた。⁽⁸⁾

下半身が永遠に吠えつづける犬にされ、その足は二二本、頭は六頭、頭には三列ずつ歯がならぶ（ランプリエール辞典・参照）。怪獣にされたシーラは狂乱する。かの女を愛していたグローカスは、恋人の無残なメタモーフオーシスに涙を流し、サーサー（キルケ）の求愛を退けて逃げる。シーラ（スキュラ）は、魔女への怨みから、オデュッセイの仲間の舟乗りをうばい、のちに、イタリアとシリリーのあい

だの海に投身自殺、岩になつた。シシリーア海岸のカリブディスの渦巻とともに、舟乗りにとつては、恐ろしい暗礁として知られている。「カリブディスの難をのがれたら、スキュラの餌食となつた」の諺の生まれる因子となつた。

古典神話では、シーラは、このように怪物にされ、舟を難破させる岩となつてゐる。キーツはシーラを変身させ、すに、いちど、グローカスを魔女の誘惑に負けさせる。そのあと、彼が正体を知つて逃亡した罪で、シーラを殺し、グローカスにも、贖罪として千年のあいだ、海底に縛りつける方法をとつてゐる。このあと、救済者エンディミオンが登場。呪が解け、シーラは生きかえり、グローカスは、青春の姿にかえり、二人の恋は成就する結末となる。キーツの『千年の贖罪』のモチーフが、グローカス＝シーラ神話を再解釈し、修正した重要な点であるといつてよい。では贖罪千年の恋のプロセスを、『エンディミオン』にしだがつて、追つてみよう。

サーシーは、はじめから『残酷な魔女』(III・413)として登場したのではない。シーラを忘れさせ、『宿命の力』(III・45)で、じぶんの妖しい、官能のとりこにする。キーツは、かれの詩に特有の昏睡＝覚醒のパターンを、ここで

使用する。夜明けの薄あかりの木かげで、昏睡からさめたグローカスを待つていたのは、愛のため涙を流す、可憐で魅惑的な乙女のサーシーであつた。

めざめるとほの明かりの木かげにいた

ちょうど黎明のひかりが新緑の木の間に

さしこみ、蜜蜂がうなつていて。

なんと甘美な、より甘美な声音——

リラの音

吐息つく声を聞いたのだ。

声はやみひそかな足音がして黎明のまだ

見たこともない美しい顔がバラの茂みから

現われた。涙と微笑と蜜のことばでかの女は

編んだ花咲く樂土よりも囚われるのが楽しい恋の網を。すると、甘いことばの露が落ちた。

(第三卷、四一八—四二八行)

はじめは、羞じらう処女のように清純な初々しさだつたので、グローカスは、「官能の女王におぼれた／愛欲の下僕」(III・45—46)へ堕落。この『宿命の女』は、海のニンフへの激しい恋を忘れさせるほど、妖しい美しさで、その吐く

息は「神の芳香」のように甘く、バラ園で、かれを眠らせた。「ある朝、グローカスは、夢うつて、あの滑らかな両腕と唇をもとめ、らくだの甘露を飲みほすように／貪欲な愛欲の渴きを、いやそうとした」(四・478—490)。しかし、女はいなくなっていた。狂ったように、森じゅうさがし回つた。すると、遠くから、墓場からのような苦悶の呻き声が聞えてくる。暗い谷間の声のする方に降りていくと、かれの見たものは、もう愛らしい処女の姿ではなくなつた魔界の女王のサーシーだった。じぶんの愛欲の奴隸となつた哀れで異様な獸たちを、サド的に虐待する魔女の姿だった。

茨のやぶに燃えかかる　ぶきみな青い焰に
近づくと　呻きはさらに高くなつた。焰は
まるで　とぐる巻く蛇の目のように私を
惹きよせた。やがて恐怖とよぶにはあまりにも
恐ろしい光景を　まのあたりにみた。
茂みにかくれ　すさまじい　情景を呪つた。
わが両腕の　宴　わが木かけの女王が
ひきぬかれた森の木の　根っこに坐り、
まわりに　魔法をかけられた　獸じみた

異形の怪物が　笑い　泣き　這い　のたうち

歯や牙をむきだし　毒の袋や毒針をみせて
囲んでいた。ああ　なんたる醜悪な姿！

冥府の川のケアロンでさえ、渡し賃の取りたてを
しばらく止め、三途の川の草にまどろんでも
これほど奇怪な夢を　みることはなかろう。

魔女サーシーの形相は　ものすごく
蒼ざめ、横暴で、ねじれた木の笞で
かれらを　打ちのめしていた。

(第三卷、四九一一五〇八行)

サーシーは、さんざん打ちのめすかとおもうと、ふいに笑い声をあげて籠いっぱいのブドウの房を、投げあたえる。この醜惡の獸たちは、かつての、かの女の恋人たちで、いまは、浅ましい姿にかえられている。かつては、乳児のように、バラ園で、サーシーの愛撫を受けたものたちである。この段階のサーシーは、やさしい「母像」的な、愛らしい女性である。しかし、その表裏性は、サド的魔女への変貌で明らかになる。かつての恋人を獸に変え、枝の鞭をふるい、ブドウの房をあたえる。たしかに、そこに

は、〈理想の母像〉から、〈怒れる魔女〉への恐るべき変貌がある。そこには、「母像の愛にひそむ破壊的な怒り」の要素があるともいえよう。この官能の女王の飴と鞭の使い分けは、あざやかである。ブドウのイコン（図像）は、ふつう〈陶酔〉、〈快楽〉、〈情欲〉の意味で用いられ、さらにイヴの食べたりングのように、〈誘惑〉のシンボルでもある。キーツ的陶酔のファンタジーのなかでは、欺瞞的なニューアンスはあるにしても、〈性的呪縛〉の意味があり、いつまでも、獸たちを、じぶんの官能の奴隸として支配する意味合いがある。サーシーのサド的快楽は、鞭をふるうだけではない。寄生木の枝に「すすけた油」のよくな〈黒い毒液〉をつけて、獸たちの目になすりつける。すると毒と麻薬の相乗効果はできめん。快楽と苦痛で、のたうちまわる。獸たちは、みるみるうちに、尻尾の先から喉もとまで、身体がふくれ上がり、苦悶の叫びと悲鳴あげて、夜空を、バイソン（ギリシア神話の大蛇）さながら吹きとばされていく。〈黒い毒液〉は、まさに致命的で、「エロチックな儀式の黒魔術的パロディ」の効果さえあげている。

じぶんの色香に迷った男どもを、畜生に変える構図は、

泉鏡花の『高野聖』（一九〇〇年）にもみられる。超自然の洪水の現象のため、不死になつた美女が、深山に住み、迷いこんだ旅人を谷川の水浴にさそう。白い裸身に魅せられ、愛欲に狂つた男どもを、この妖女は、浅ましい姿に変える。鏡花の魔女は、「男をより取つて、飽けば息ふきかけて獸」にする。馬、蛙、コウモリ、猿、羊、ムササビなどの魑魅魍魎の群れと化した男どもは、月夜の晩に、美女の孤屋をとりまき、求愛し、うめき、なき、叫ぶのである。新しい客のあるときは、この美女は、「静かにおし」とやさしい声で一喝するのは、かえつて凄味がある。

男を畜生に変える〈怪しい水〉の谷川の水は、魔性の女の意のままにはたらく、女そのものの属性であり、妖しい呪縛的効果がある。しかも、その水は、白い靄となり、女の裸身をより魅力的、神秘的にする。液体の水が形を変えて、氣体化し、幻想的な美しさをつくりあげる。いつてみれば、水のアイソメリズム（同質異形）のふしげさである。鏡花の〈水〉は、無意識の心理とも連動し、現実から幻想界への通過儀礼的な役割をも、はたしている。

鏡花のいまひとつとの作品、『春昼』『続春昼』（一九〇六年）にも、男に致命的な、水にまつわる〈宿命の女〉、王脇み

をが登場する。「恋も無常も知りぬいた風の女で、恋い慕うものならば、馬主うまかたでも船頭ふなかしでも、坊主ぼうしでも無下に振切つて邪魔にはしそうにない……何處へ障つても情なまけの露は男の骨を溶解とうろく⁽¹⁾かす」女である。散策士がナレーターを勤める、この作品では、寺の住職から聞いた話で、〈客人〉がこの女性に惹かれて、溺死する運命となる。春の宵、祭囃子に誘われ、客人は山に入り、海ぞいの山腹の洞くつのなかで、奇怪な女の集団を見る。そのなかに、かねて意中の女性、王脇みを見つけておどろく。岩舞台に上った彼女は、魔女的で、その横に坐りこんだ男を見て、客人は、さらにドツベルゲンガーおどろく。それは他人ならぬじぶんの影、分身ぶんしの彼そのものだったからである。その男は、女の背中に△□○(たぶん、火輪、地輪、水輪の意味)の謎の記号コードを書く。その記号表現が、どのような記号内容となるかは、男と女のあいだの精神的感応の深さによる。その記号が、愛のコレボレーション交流として働くとき、男の運命は、女の犠牲となり、客人は異界の水の世界へ回帰する。その回帰が、現実的に死となることは、じぶんの分身ぶんしをみたときに、すでに客人には理解されている。自己の分身は、死靈であり、分身をみた者は死亡するというのは、西欧や日本での

一般的解釈となっている。絵画でもD・G・ロセッティの『自己の分身』の絵でよく知られているとおりである。

この物語の後篇の『続春昼』では、客人の死亡したのち、散策士が、妖女王脇みをと会い、その話を聞く。想う男とうまく会えない苦しみを聞かされるが、その会話にも多情多恨の女の片鱗がのぞいている。巻き添えを食つたのが、目もと涼しい越後獅子の少年。かれは、例の記号を書いた紙片を女からもらつた翌日、水死する。ただ少年は、王脇みをの死骸の乳首を口にふくんだけ溺死体となつて打ち上げられるのである。ここで、王脇みをは、純粋な少年を誘惑、愛撫した〈良い母像〉と、〈悪い母像〉の両面をもつてゐる点には、注意しなければならない。愛に溺れてはならない〈宿命の女〉が、愛のため自滅し、慈愛の母と、恐ろしい魔女の両面価値性を、あわれにもさらけ出している。人間の男を、官能の愛で破滅させるのはよいが、ほんとうに愛してはならない魔界の捷、タブーに触れて、自滅するわけである。王脇みをが、水の世界の精であるかどうかは、はつきりしない。ただ異境につながる女人であることは、まちがいない。春の日射しを、「肌はだが蕩ける」ような快感で、光を浴びていると、じぶんが、「水になつて溶けて、消えて」

行きそだといつてはいる。〈水〉が女の属性であり、したがつて、〈水〉、〈海〉が、女としての彼女と、人間の男たちとの愛を成就させ、誘惑を成功させる世界といつてよいだろう。「恋は人の目を誘う。水は人の心をひく」(『夜叉ヶ池』)といつてはいるように、鏡花にとつて、〈水〉は、重要な人間の心の無意識の要素であり、強力な愛の事件の媒介であつたようだ。いずれにしろ、水と関係する魔性の女が、男に〈苦痛淫欲〉をあたえ、責め苛む妖魔劇の構図は、洋の東西を問わない。

(三)

理想の母像から、〈怒れる魔女〉、〈サドの女王〉へと変身したサーサーの激怒は、キーツ「エンディミオン」にあっては、グローカスの愛する海の妖精のシーラ殺りくへと繋がつていく。そのまえに、逃走を企てようとしたグローカスを罰することを忘れはしない。じぶんの愛を裏切つた〈かわいい殿(サ'イントエイ)〉(III・50)は、殺しはしないが、白髪の老人にして千年のあいだ、海底で贖罪の生活をさせる復讐(ホモイユ)をするのである。かぎりない海原に泳ぎでるがよい。しか

し、いく日かたたないうちに、不自由な老いが〈おまえの青春のすべての花〉(III・591—592)を追いはらうと予言する。「生きながらえ衰え不具の老人になつても／なお千年も生かしておくとしよう。／それがすぎたらおまえの脆い白骨をさびしい葬いに／まかせよう。さらば！」といふらしい恋人よ、さらば！(III・597—600)。グローカスの赦しを乞うまもないほど、すばやくサーサーは姿を消す。これは、青春のさかりにある若者にとつては、あまりにもきびしい一方的宣言であつた。

うろたえながら 大波とこうして戦つてゐると、
ふいに 死人の顔に手がふれた。
みると、それはシーラだつた！ いまいましい
サーサー奴！ おお、ハゲタカの魔女よ、
おまえには 情けがあるのか、このやさしい
清純な処女を わたしが愛したからといって、
その生命を 摘みとらないかぎり
おまえの復讐(ホモイユ)心は 満足しないのか。
ああ、美しい肢体は 冷たい、まったく冷たい
いま その髪の毛を 浮草のように

波のうねりがとらえる。息たえていたものの

かの女の腰を抱きしめ、底知れない海のなかを、矢のように進み、サンゴや小石、真珠をちりばめて輝く 水晶宮についた。

まっしぐらに笑き進み、一気にかかるい

門につき、なかへ入った。みよ！ なかは、

ひろびろと、寂しく、氷のように冷たかった。

まわり一面は——だが、きみに言う必要はない

——まもなく、きみの目で確かめられるから——

わたしは、あわれ、シーラを壁がんに残して、去つた

(第三巻、六一六—六三五行)

水晶宮の壁がんに、シーラの屍体を安置してから、まもなく、グローカスは、〈不死のからだ〉(III・588)の特権を奪われ、にわかに年をとり、手足は萎え、千年のあいだ、生ける屍となり、海底で呻吟する身になる。その青春から老年への急転のさまは、「樂園を追われた点で、アダムに似ている」かもしれない。〈贖罪の苦惱〉を味わう身となるわけである。贖罪は、キリスト教的な意味でいえば、主が人類に代わって十字架にかかり、その罪をあがなつた

故事より、おのれの罪でなく、他者の犯した罪をあがなうのが、原義だろう。しかし、一般的には、じぶんの罪のつぐないの意味である。グローカスが、心ならずもサーシーの誘惑に負け、一時的に、官能の奴隸となつたのは、そして罪のない水の妖精シーラに死をもたらしたことは、一種の罪といえるだろう。だが、サーシーの側は、じぶん達の愛を裏切つた点で、グローカスに、愛の不実、裏切りの勝手な罪をきせて、アイロニーである。おのれの実体、乙女ぶつた可憐な女性と、魔性の女というヤーヌス的二面性を、グローカスに隠していたのは、どう説明するだろう。これも、また欺瞞の罪ではないだろうか。キーツは、〈罪〉の問題についても、両者の側にある点を、読者に示しているといえないだろうか。キーツが、サーシーが激怒の結果、グローカスを海底に呻吟させ、シーラを殺す(もつとも、のちに復活させるが)という報復にでる筋書きを作つたのは、みごとな創意といえるだろう。そのコンテクストによつて、罪と罰、贖罪と再生というモチーフが、はじめて、グローカスⅡシーラ、グローカスⅡサーシーのエピソードに、でき上がつたからである。その点では、オウディウスの『転身物語』¹³のように、たんにシーラをグロ

テスクな怪獣に変えるという伝統的手法よりは、複雑で、興味ある展開となつてゐる。

贖罪者としてのグローカスは、このあと、どのようにして〈救済の機会〉が訪れたか、やつてきた救済者のエンディミオンに話す。グローカスの回想部分である。

ある日、グローカスは、波しぶきのかかる岩礁から冲い豪華船を見る。しかし、嵐がふきおこり、船は難破。乗組員は、ひとり、またひとりと、蒼ざめた忘却の海へ沈んでいく。かれは苦境にありながら、〈他人の悲惨を、みずから悲惨とする〉共感精神から、乗組員の死を悼むのである。呻いてゐると、足もとに、別の老人の手がのびてきて、〈巻物〉と〈杖〉を渡して奈落へ沈んだ。巻物の中身は、この広い海に、みじめで〈孤独の人〉が住むが、千年のちに、ひとりの若者（エンディミオン）が現われ、解放してくれるという内容だった。この話を聞いて、エンディミオンは、グローカスに、では、われわれは「同じ宿命の双生児の兄弟だ」（III・73）と連帯感を強調する。エンデ

イミオンも、グローカスを救済し、無私の共感の愛を示すこと、みずからも救済され、探究する月の女神に会える宿命だつたから。ここで、グローカスは、水晶宮におもむ

き、シーラや難破して死んだ恋人たちの遺体安置所を、エンディミオンに教える。そのあと、呪文をとなえながら卷物を紙片に切りさく。紺青色のマントに、エンディミオンを包み、杖で虚空をうち、エンディミオンの願の成就するよう祈る。つづいて、エンディミオンは、紙片をグローカスの上にかけ、解放の儀式をする。

なんと稻妻のようにすみやかな変身だろう！

ひとりの若者がサンゴの冠のもとに
にこやかに微笑み、宝石のころがるよう
にきらびやかに光り輝きながらあらわれた。

美しい亡骸にちかづきひざまずいて
愛情あふれる手で冷たい手をにぎり泣いた。
するとシーラは息づいた。エンディミオンは

すばやく呪いをするとニンフは甦つた。

（第三巻、七七五—七八二行）

贖罪の千年の苦悩のあと、グローカスには青春がもどり、恋人たちも蘇生して立ちあがる。手足の萎えた老人から、〈宝石のころがるように／きらびやかに光り輝く〉青年へ

のグローカスのメタモーフオーシスは、劇的なまでに鮮やかである。西脇順三郎は、ここを神の生誕の日の輝かしさに変奏し、「覆された宝石」のような朝⁽¹⁵⁾と表現したのは、よく知られているとおりである。「死は、その亡骸⁽¹⁶⁾のなかに泣きながら倒れ」(三・788)、グローカス、は青春をとりもどした「新しい神」(海神)として生まれかわる。

死と直結した千年の贖罪、しかも魔性の女サーシーがグローカスに強制した〈死〉との契約——「おまえの脆い白骨を、さびしい葬いにまかせよう」——は、いまや破棄される。このあたりの解釈は、旧約聖書『イザヤ書』のなかの〈死の契約〉と結びつけられるかもしれない。エルサレムの人々を支配し、嘲ける人々は「われわれは、死と契約し、陰府と協定を結んだ」(28・14)と豪語し、偽りで保身をはかつた。このことばに、主⁽¹⁷⁾は、公平と正義が測量の基準であるとし、「死とたてた契約は取り消され、陰府と結んだ協定は行われない」(28・18)と匡されたのである。この意味で、ギリシア的要素とキリスト教的要素の混融があり、エンデイミオン^{II}キリスト^{II}救済者、グローカス^{II}アダム^{II}贖罪者という、パラレルの等式をたてることも可能だろう。甦るまえのシーラの死骸に泣くグローカスは、ラザロ

のうえになくキリストを、重ね合わせることも、できよう。
〈愛の基本的な罪、不誠実〉⁽¹⁸⁾かどうかは、問題があるにしても、その罪をあがない、おなじ境遇の難破船の恋人たちを救つて、グローカスは、シーラやエンディミオンをつれ、海神ネプチューンの宮殿にいくことになる。

夢さめて 愛らしく赤らめたシーラを

まつさきにみちびき、正門の大門をぐぐり、

やさしい驚きをみせがちな ニンフをつれて

はてしなく高いエメラルドの円天井の宮殿に入った。

グローカスの導くまま、嬉々として みんなは

したがい、大理石の階段を降りた。なめらかさは、

砂時計の砂のよう、すみやかさは 南の

夏空にあこがれて 蟻⁽¹⁹⁾の飛びいくよう

また白鳥の急流を、すーっと流れようだつた。

(第三卷、八〇九—八一七行)

途中から、甦った恋人たちも合流、ダイヤモンドがきらめき、琥珀⁽²⁰⁾が金色にかがやく宮殿——メンフィス、バビロン、ニネヴアの宮殿よりも、はるかに美しく広大な宮殿へ

急ぐ。黄金の門に近づくと、〈妖精の幻想〉(III・85)みた
いに、さっと門が開き、なかには濃緑の王座にネブチュ
ン、左にはヴィーナスが坐り、右にはキューピッドが立つ
ていた。一同は、呼吸する大気の床や、青空が海に円屋根
をつくったような莊嚴な大広間に目を奪われて、立ちつく
す。そのとき、トライトンの角笛が高鳴り、宮殿にひびき
わたる。「^{ホラ}海の妖精がおどり、シレーネがかすかにうたう」
(III・89)。ヴィーナスは、かれらを招き入れて、海のニン
フのシーラの頬に口づけて祝福、饗宴が始まる。

こうみると、サーシーの呪詛と復讐の意図にもかかわら
ず、キーツは、愛らしいシーラを最終的には殺さなかつた
ことがわかる。シーラの死は、一時的な仮死か眠りにちか
いもので、グローカスの贖罪のあかつきには、再生し、二
人の愛を成就させる〈予示^{プリファチャレーション}〉⁽¹⁹⁾的なものだつた。(不
滅の情熱の、ながいひとつの予示)といつてよいものであ
る。グローカスのサーシーへの官能的愛の代償として、シ
ーラを抹殺するには、シーラは、あまりにも清純で無垢で
愛らしい女性である。オウイディウスのように、怪獣に変
え、岩に変えて殺してしまうには、あまりにも哀れで善良
な女性といつてよい。グローカス＝シーラ、エピソードを

読むとき、サーシーの妖魔性と、きわだつたバラレルとな
る清純性、天上性が、シーラにはある。『エンデイミオン』
の作品分析で、対照的な女性のアーキタイプ——
〈清純な女性^{フェアメイド}〉と恐るべき〈宿命の女^{アムラカル}〉に分け、前者を月
の女神シンシア、後者をサーシーにした批評家⁽²⁰⁾がいる。こ
の区分は、すこし修正して、シーラとサーシーとすること
に、異存はあるまい。このエピソードで、水の妖精のシーラ
の存在が、サーシーの強烈な個性のため、けしとんでい
るが、その蠱惑的な美しさは、控え目に描写されているも
の、サーシーの妖艶さを退けているくらいである。(宿
命の女)が、その発生的な旧解釈、男を破滅させる悪女の
意味から、OEDのサプレメントにあるような「愛らしく
て魅惑的」で、男に運命的な影響力をもつ女性と解釈す
れば、邪惡の意図はなくとも、シーラは、まさしく〈宿命の
女〉である。青い水のなかを、白い裸身をみて泳ぐシーラは、夢と意識の中間にあるブルースト風な理想的な女性
像かもしれない。

彼女の眠りは、ひとつのかぎりの風光のように思われた。それ
は、私のかたわらに、穏やかな甘美に肉欲をそそる何

物かを、ちょうど満月の夜にバルベックの入江が湖のように静まり返り、木々はそよとも動かず、人は砂に寝そべつて、いつまでも引き潮のくずれる音を聞いていたくなるような、そんな何物かをおくのであつた。⁽²¹⁾

ブルーストにとつてのアーニマ的女性原型像は、満月の夜、入江の砂浜にねて、引き潮の音を聞いていたくなるような、その存在も眠りも、ひとつの風光のよう、しづかで甘美な女性である。著者と風景と女性が、一体化しているよう、自然で抵抗を感じないアーキタイプなのである。優美な髪を、波に泳がせている、アール・デコのガラス細工のなかのよう女性が、シーラであるとすれば、シーラは、ブルースト的な理想の女性像といえるだろう。作品中のシーラは、寡黙で、ひかえ目なために、よけいに余韻に富んだ美しさである。いつみれば、清純で善良なタイプ、水の精のため、超現実的で、妖精的な女性原型像に描かれている。これに対し、サーシーは饒舌で、気性のはげしい魔女である。はじめは、羞じらう處女の初々しさをもつ可憐な女性であるが、魔性の正体を知られると、〈残酷な魔女〉に早変りする。乳児のように男を抱き、

バラ園であやす〈理想的な母像〉であるかと思えば、復讐に燃える〈怒れる魔女〉〈官能の専制女王〉の本性をむき出しにする。〈かぐわしいアンブローシャの息をして／夢の黄金の国に男をひたらせる〉(III・454—455) 妖しの美女と、〈呪われたハゲタカの魔女〉(III・62) の二面性をもつてゐる。可憐な〈精神美のシンボル〉⁽²³⁾ のシーラよりも、ある意味で、グローカスに横恋慕する〈官能美のシンボル〉のサシーの悪女像には、生命が通つてゐる。自己愛が中心で、じぶんの欲望をみたすためなら、男を白髪の老人にし、ライバルの女性を死に逐いやるものも平気な悪魔性がある。美しい肢体で男を誘惑するとともに、破滅をもたらす二重性をもつために、いつそう危険な存在である。欺瞞と本体、純情ぶつたベルソナと、サド的妖女の両面価値性をもつために、いつそう謎めいてみえる。妖婦タイプ、魔女型の〈宿命の女〉といつてよい。サーシーは、まさしく、このタイプに属する「よこしまで、圧倒的に破壊的であつて、しかも魅力的な美女」⁽²⁴⁾ である。このタイプに入る〈宿命の女〉には、謎めいた微笑のラ・ジョコンダ、妖艶なひとみとけだるい姿態のロセッティの絵〈リリス姫〉、白く輝く胸肌で修行僧を挑発するルイスの『僧侶』(一七九六年) の妖婦

マチルダなど、例がおおい。男をとり憑かせる強烈なエロチシズムと、善悪入り乱れた悪女の欺瞞性——これが妖婦型〈宿命の女〉の不可欠の要素である。快楽の致命的代償をはらつても、男は快楽の棘の苦痛に酔うのである。サーシーは、グローカスにとつては、そうしたカテゴリーの〈宿命の女〉であり、〈虚偽の官能美の化身〉というふざわしい。こうしたラ・ベル・ダム・サン・メルシー（情ない美女）への、一時的であれグローカスの狂熱の愛を、シーラへの愛情の裏切りとみる、常套的なアレゴリー的解釈もよい。しかし、オウイディウスの原典にはない、このサーシーの官能美へのグローカスの陥落は、すでにのべたように、キーツの贖罪の苦悩と救済、復活のよろこびという重要なモチーフがかくれている。と同時に、救済の方法として、グローカスの他者の悲惨への共感という他者愛の必要性が指摘されている。千年という減刑されないグローカスの長い贖罪の苦悩に、キーツの別の大作『ハイビアリアンの没落』（一八一九年）のなかのタイタン族の女神モネタの蒼白な顔にみられる、一族の没落の悲哀と苦悩を重ねてみることもできよう。じぶんの苦しみを忘れて、他者愛にめざめるとき、人間には自己救済の道がひらかれるというテ

ーマが、このグローカスⅡシーラ、エピソードにはふくまれている。グローカスが溺死した難破船の乗員に同情の愛を注ぐとき、救われたように、エンディミオンも、この苦悩するグローカスの悲惨への共感の愛をおぼえて、はじめて、探究する月姫との愛の成就が実現する。グローカスⅡシーラのエピソードは、エンディミオンⅡシンシアの愛の完成に必要な前奏曲で、意味ぶかいパラレルの物語というわけである。

しかし、ここで私が問題にするのは、むしろ、そうしたメイン・テーマの陰にかくれている、シーラとサーシーという対照的な女性の原型像の分析の問題である。キーツは、女性像について、大きづばに二つの種類に分けているようである。かれの手紙（一八一八年十月、ジョージ夫妻宛）に出てくる、物事を判断する二つの氣質のなかにふくまれてゐる箇所が、それである。ひとつは世俗的で、芝居じみて茶番劇的なタイプ、いまひとつは、天上的で、精神的で、靈的なタイプで、前者は、カーミミアン（クレオパトラの侍女）的女性で、〈男の目を磁石のように吸いつける〉官能的美女、ジエイン・コックスが入る。後者は、キーツの弟の嫁のジョージアナのような清純タイプだといふ。そして「私は前

者のような女に破滅させてもらい、あなた（後者）に救つてもらいたいのです」と告白している。性的で官能的な女性の愛に溺れ、精神的で清純なタイプの女性に救済してもらいたいと、虫のよい願望をのべてゐるわけである。たがいに矛盾するようであるが、こうした両極の対照的な女性像の存在が、キーツには必要だったといえる。『エンディミオン』のサーシーとシーラが、ちょうど符合する女性原型像である。グローカスを、キーツの代弁者とみれば、まづ〈虚偽の官能美の化身〉の魔性の女サーシーに熱中し、その恐ろしい〈宿命の女〉の正体を知つて逃げだし、贖罪の千年を海底で、すごすが、変らないニンフのシーラへの純愛と、他者への共感の愛で、エンディミオンの力を借りて救済されることになる。ただ、愛欲のあずまやの魔界に君臨するサドの女王、サーシーは、全面的に邪悪な女性ではない。おららしい乙女役と、男を隸属させる、恐ろしい〈ハゲタカの魔女〉という両面価値的な二面性、表裏性をもち、いざれか一方に変化できる〈可変タイプ〉の女性像である。シーラは、グローカスとおなじ、〈異界の生物〉の水の妖精で、清純で純情な〈不变タイプ〉の女性のアーティタイプである。キーツの奔放で、フレキシブルな想像力

は、かれじしんの「想像力が高まるにつれて、いつそう強く感じるのは、私がこの世ばかりか、数知れない世界の住人だということだ」⁽²⁷⁾の文面で証明されているとおりである。グローカスの人間から人魚男、海神への変身、シーラへの献身愛のなかに挿入されたサーシーとの愛欲生活、シーラへの死亡、海底での贖罪、シーラの蘇生、愛の復活という独創的なグローカス神話の再解釈、再構築に、いかんなく、想像力が駆使されている。こうみると、「性的エクスタシー」が、精神的な毒となり、自己喪失と死につながる⁽²⁸⁾のは、贖罪まえの一時的現象にすぎず、ましてや「グローカスの熱愛」と、無力と老齢への帰結は、ロマン的探求の全概念の戲画⁽²⁹⁾とする解釈は、贖罪のプロセスの一段階のミクロ的展望にすぎないことがわかる。グローカス＝シーラ、エピソードを、統一的に全体としてみると、じつに意味ぶかい〈多面価値〉をもち、『エンディミオン』第三巻「海底」の巻のみならず、作品全体の他者愛と自己救済のライト・モチーフと密接な関係のある点に気づくだろう。また、オウディウスの原典をはるかに抜く、作者のグローカス神話の再読、再解釈が、魅力的なシーラ、サーシーの女性原型像を創造し、興味ある重厚な挿話としている点を忘れて

せなんふねこ。

註

- (1) ガスナー・マーハウル、小浜俊郎・桜木泰行訳『水と夢——物語の想像力にのじる』(国文社、一九六九年)、238~239。
- (2) Bernard Blackstone : *The Consecrated Urn: An Interpretation of Keats in Terms of Growth and Form* (Longmans, 1959), p. 156.
- (3) ホウイット・ヤウベ、田中秀央、前田敏作訳『転身物語』(人文書院、昭50(重版))、48~49。
- (4) 同掲書、48~49。
- (5) 同掲書、48~49。
- (6) Miriam Allott (ed.) : *The Poems of John Keats* (Longman, 1970), p. 223 f.
- (7) F. A. Wright (Rev.) *Lemprière's Classical Dictionary of Proper Names mentioned in Ancient Authors* (Routledge & Kegan Paul, 1951), p. 568.
- (8) George Sandys : *Ovid's Metamorphosis Englished. Mythologized, and Represented in Figures*, eds. K. Hulley and S. T. Vandersall (University of Nebraska Press, 1970), p. 621.
- (9) Barbara Schapiro : *The Romantic Mother* (The Johns Hopkins U. P., 1983), p. 49.
- (10) Dorothy Van Ghent : *Keats: the Myth of the Hero* (Princeton U. P., 1983), p. 68.
- (11) 泉鏡花『春暉』
- (12) Jeffrey Barker : *John Keats and Symbolism* (The Harvester Press, 1986), p. 67.
- (13) Baker : *Ibid.*, p. 68.
- (14) Keats : *The Fall of Hyperion*, I. 148~149.
- (15) 西脇順三郎「天國」(*Ambaravaria*) (昭和八年)
- (16) *The Old Testament*, 'The Book of Prophet Isaiah', 28 : 14 & 18.
- (17) Baker : *Op. Cit.*, p. 70.
- (18) Newell Ford : *The Prefigurative Imagination of John Keats* (Stanford U. P., 1951), p. 141.
- (19) Ford : *Ibid.*, p. 146.
- (20) *Ibid.*, p. 55.
- (21) マルセル・ブルーベー、鈴木道彦訳『失われし時を求める第五部「囚われの女」』(中央公論社、一九七〇年)、86~87。
- (22) Schapiro : *Op. Cit.*, p. 48.

- (23) C. L. Finney : *The Evolution of Keats's Poetry* (Russel & Russel, 1963), p. 312.
- (24) Patrick Badde : *Femme Fatale* (Mayflower Books, 1979), p. 9.
- (25) Helen Vendler : *The Odes of John Keats* (Harvard U. P., 1983), p. 219. 細註。
- (26) Keats's Letter to George and Georgiana and Keats, Oct. 〈14—31〉, 1818.
- 船浦 暢報『キーンの手紙』(駐妻畫房、一九七一年)、74
乞一六参照。
- (27) *Ibid.*, 『キーンの手紙』76×—'58。
- (28) Dorothy Van Ghent : *op. cit.*, p. 43.
- (29) Stuart M. Sperry : *Keats the Poet* (Princeton U. P., 1973), p. 108.